

すべての人に

健康を

シエラ・国際保健協力市民の会

シエラは、カンボジア東部に位置するプレイベン州の農村地域で、「子どもの健康を守る」という目標のもと、公的保健センターで行われる乳幼児健診の強化に取り組んでいる。

内戦後30年経過したカンボジアの首都の経済発展は目覚ましく、国際援助により全般的な保健医療状況は改善されつつある。しかし子どもの健康状態は近隣諸国と比べて劣悪だ。

10人に1人の子どもの5歳まで生き延びることができない。住民にとって最も身近な公的保健サービスは、質量ともいまだ不十分。健康大患が患ひこ

8

乳幼児健診

虎頭 恭子



住民参加で健康づくり

ら首都の病院を受診するた
め、子どもの命が助からな
いばかりか、後に残るのは

交通費や付き添いの費用で
かさんだ借金だけというこ
とも起こる。例えば首都プ



乳幼児健診で子どもの成長について説明するカンボジアの保健スタッフ=2010年12月、カンボジア・プレイベン州

地域、保健機関と連携図る

ノンペンから車で3時間の村から、首都の病院に行くため救急車を呼んだ場合60ばかり、これは公務員である助産師の月給45を上げる。

乳幼児健診は公的保健サービスの一環だが、1万人の住民に対し1カ所という保健センターの限られたスタッフだけで定期的な実施は難しい。そのため保健ボランティアと呼ばれる地域住民の協力が必要だが、スタッフの大半がボランティアとの連携を避け、健診も全く行われていなかった。

そこでシエラは、健診実施のための基本的な知識や支那の能力を高める研修

加えて、保健スタッフと保健ボランティアのコミュニケーションを円滑にするため、定期的な会議の支援や協力関係がうまくいっている地域への視察などを行ってきた。

この働きかけを通して、スタッフとボランティアが共通の目標を持って一緒に活動する場ができた。積極的に参加するボランティアの様子を実際に見たことで、スタッフの姿勢も以前より協力的になった。

さらに今まで一度も子どもの体重をはかたことがなかった親や養育者たちは、健診を通して子どもの成長を知ることができると、自ら定期的に参加するようになった。「8キになったのよ。あなたの子はどうか？」と互いの子どもの成長を喜び、最近では離乳食

や家庭でのケアについて情報交換する姿など村人同士の学びあいが生まれている。

村に入り込んで行う健診活動は、今までほとんど把握されていなかった重症化リスクが高い栄養不良児の発見にもつながっている。

シエラは、とかくトップダウンになりがちな仕組みの中で、地域の人々が「健康なコミュニケーションづくり」の当事者となることを目標とした、人と場づくりに取り組んでいる。住民が健康づくりの中心となるプライマリ・ヘルス・ケアのアプローチは、時間はかかるが、確実に地域の健康の課題を解決に導く鍵なのだ。

(シエラカンボジアプログラム・アドバイザー)